

江戸文学と珠算(4)

鈴木久男

目次

- 一 川柳
- 二 戯曲 (歌舞伎)
- 三 その他

一 川柳

川柳の前身に前句付がある。

前句付、冠付、奮付、折句などを総称して雑俳と呼ぶが、俳諧の俗化して生れたものが雑俳、川柳である。
高野辰之の「江戸文学史」下巻によると、前句付は

江戸文学と珠算

前句(課題)
蝶まひ込し障子立てけり 尼寺は女の花の散りどころ

のように、短歌の上半分または下半分が課題であつて、他の半分をつけて一首として完成したものであるという。

冠付は

冠(課題)

付句

さりとは 絵よりきくより 富士の山

の如く、第一句五文字を課題として、第二句七、第三句五の句をつけて一首とするもの。

沓付は

付句

思ふさま 立つあとたゞく

沓(課題)
額の蚊

の如く、第三の句を課題とし、これに第一第二の句を付けて一首とするもの。

折句とは与えられた二音または三音などを各句の上にする。たとえば

課題 かきつゝかときとつゝの三音を各句の上に置いて作ると

片手業 奇麗娘の 摘む真綿

のようになる。片のか、奇麗のき。摘むのつが句のように奇麗に入っている。

この前句付の選者に柄井川柳(享保三ノ寛政二)という人があつて、この人の点したものを川柳点といった(略して川柳と呼んだ)。この付句の独立したものが川柳である。

俳句と同じように十七の文字を使うが、季題を詠みこむ制限はなく、や、かな、けり等の切字もいらぬから自由

であり、対象も人事や世相に求め、自然の姿を見きわめようとする市井の生活から生れ出たものだけに、当時の世相、民衆の生活そのものを誇張なしに表現している。

川柳の母胎となった前句付は元禄の末ごろから江戸、大阪、京都ですこぶる盛んであった。川柳に關係の深いのが「武玉川」四季庵慶紀逸の選で、初編の刊行は寛延三年、柄井川柳の選した柳多留の初編の刊行より十五年前であった。

初代の川柳点の中から、前句を除いても意味の通じる句を選んで、吳陵軒可有（木綿子）が明和二年に編集したのが「柳多留」初編で、以後二十二編までが吳陵軒の撰、これが持続して天保九年までに百六十七編が刊行された。

柳多留の選に洩れた初代川柳の選句中から、さらに抜録し「古今前句集」と題して寛政八年発行したものを享和に入つて「柳樽拾遺」と改題したのもあり十編に分れている。

「川傍柳」五編は安永九年から天明三年までの間の刊行で、やはり初代川柳の選である。安永、天明のころが川柳が絶頂に達した時期であつて名句も多い。初代川柳以下江戸時代までに五代、現在まで十三代が続いている。以下その中からそろばん句を拾つてみよう。

武玉川

節季の息子 算盤に乗

(初編)

玉のうごかぬ 庫裏の十露盤

(四)

寄る計 引く事のない 年の浪

(四)

そろ盤へ 乗せれば 人も怖い物

(五)

十露盤の 昼から 違ふ 三五の夜

十露盤を 伯父へ直して 消えたがり

そろばんを 息子の顔へ はじきかけ

駕から借りる 見世のそろばん

そろ盤づくで 立るにしき

あづまくだりも 今はそろばん

やがて見よ そろ盤に乗る いなば雲

欠して 胸算用を 消しておく

妹にして置もそろばん

柳多留

そろばんを ひかへたやうな だんご茶屋

十露盤へ したむ小原の せわしなさ

そろばんを 二度手に取ると 直が出来る

遠乗に そろばんのいる 事も有

色男 ちとそろばんハ にちう也

にちう||未熟

そろばんを わきへはさんで 隙な事

(十)

(二)

(二)

(二)

(初)

(初)

(六)

(十七)

(十五)

(十五)

(九)

(八)

(八)

(六)

(五)

おやのそろばんを むす子ハ破さんする

(十二)

そろばんを 壺文なげて 置なをし

(十三)

跡乗に そろばんの入る 十五日

(十四)

ぶちまけて 四ツ手四しんの一ツ四也

(十七)

梅玉の そろばん 二十五けた有

(二十)

むだよせを してそろばんの 直を付ける

(二十一)

そろばんで もらへばおぼも げびるなり

(二十三)

そろばんを 出して三度目 止メにする

(二十四)

十露盤の お舟に乗せて 丁稚ひき

(二十九)

十露盤で 貰へば嫁も げびる也

(三十)

米をとぐやうに 五の段 さらつてる

(三十二)

菓礼のとき 算盤で さじかげん

(三十四)

七の段 調布しらふ 欠落くわらくでもしたし

(三十五)

九ウしんが 一ツしん足らぬ 居候

(三十八)

人数は 九々にあはねど 義に叶ひ

(三十八)

あかるみで 十露盤かぢる 白鼠

(三十九)

十露盤は こまかにわつて かけた桶

(四十)

ゐんろうの となり そろばん名が高し

(四十)

歯のぬけた そろばんのある 村しちや

(四十)

生ま壁に そろばんづくの 妻を持

(四十)

いゝ名付 壁にそろばん 算違ひ

(四十三)

秋一無冬 そろばん とたはけ

(四十四)

紫は 胸算用で 染めさせる

(四十七)

初がつほ そろばんのない 内でかひ

(四十八)

そろばんを はしごに建て 直を登せ

(四十八)

十露ばんの 師匠に 割れる弟子はなし

(四十九)

見ん一が 上つたらばと 小町言ひ

(五十一)

孔明は 四百を 三段で割り

(五十二)

以上が六十篇までのそろばん句の全部である。この後はまだ調べていない。

柳多留以外のそろばん句につきのものがある。

丈ヶ長たけながを たつ時 九九が用に立

初代川柳選句集(さくらの実)

浪人の 渡世 浮木の亀井ざん

柳樽拾遺(五篇)

そろばんばんで 喰つてくる人に 夜具よぐの事

(八)

そろばんの 師匠 目貫のうらにすみ

算盤へ したむ小原の せはしなさ

姉始め ばちくもので 片付ける

がこれである。

(九)

(十)

川傍柳(四編)

二 戯曲(歌舞伎)

浄瑠璃を広義に解すると人形浄瑠璃劇(あやつり芝居)であり、狭義には音楽だけ、または演奏の台本すなわち戯曲のことをさしている。さらに、

上方浄瑠璃と江戸浄瑠璃。

古浄瑠璃と当流(または新)浄瑠璃(元禄以降)。

時代浄瑠璃(武家もの)と世話浄瑠璃(町人もの)と時代世話浄瑠璃(両者を混じたもの)。

という分け方と、流派別に

金平節、義太夫節、一中節、豊後節などの系統と、江戸節、河東節などの系統と、常磐津節、富本節、清元節、新

内節、薩八節などの系統の三つに分ける(新汐社「日本文学大辞典」分類などがある)。

大成期は竹本義太夫と近松門左衛門を中心とした元禄時代以降で、その後優れた太夫、作者、人形遣いが続々として輩出し、あやつり芝居として、芸術的な音楽劇として発展したのであった。

近世と呼ばれる江戸時代の、庶民文化によって育てられた二大演劇のもう一つに歌舞伎がある。

出雲の巫女みこであったといわれる出雲おおくの阿国あくにが慶長のころ念仏踊りで一躍人気者となり、やがて歌舞伎踊りと呼ばれるようになった。かぶきは傾いているという意味で、人の目につくような扮装、扇情的な舞踊からこのように呼ばれたのであった。このような美少女の踊り子たちは売笑婦も兼ねていたから、やがて幕府の取締りをうけるに至り、寛永六年に法令で禁止された。これ以後明治維新まで女の芸能人、女優が公衆の面前に立つことはなかった。

女歌舞伎が終ると、美少女の代りに美少年を置いた若衆歌舞伎の全盛となり、これも男色の弊から承応一年に禁止されるや、前髪をそって元服した男たちによる野郎歌舞伎として歩み出し、一幕物ばかりだった単純な演劇が二幕以上の多幕物へと発展して行った。

戯曲の製作も俳優の兼業であったが、専門の狂言作者を生むようになり、好色本位のものから伎芸本位のものへと進展した。

元禄期に入って荒事に名を得た江戸の初代市川団十郎、傾城事などの写実的演技に妙技を見せた京坂の坂田藤十郎などの入神の妙技、女優なき舞台上に女方芸術を完成した芳沢あやめなどの名優の努力が脚本の発達をも促したといふ。

歌舞伎の展開には三つの流れがあった。

- 1 女歌舞伎の流れ——所作事舞踊劇への発展——長唄・常磐津・清元など三味線の諸流派の発展
- 2 能狂言の血筋をひくドラマ的要素——セリフ劇の発展——喜劇悲劇への発展
- 3 人形浄瑠璃の戯曲と演出法の導入——義太夫狂言の展開

がこれである。人形浄瑠璃が発達の極地に達したのち衰退の方向をたどりはじめると、歌舞伎はその諸要素を摂取して興隆の道を行って行った。遂には歌舞伎で当ったものが人形浄瑠璃化されるようにもなつてくつらである。

歌舞伎は、あやつり浄瑠璃から思う存分に養分を吸収することによって成熟し、役者は、各自がそれぞれの芸を確立して型を成立させて行つた。女方は真実の女性以上の色気豊かな芸を顧客に誇示した。歌舞伎本来の新しい狂言も時代の要求に伴なつて創作された。

舞台もはじめのころは能舞台をうけついでだが、寛文ごろから引幕が工夫され、享保には舞台と席と観客が一つ屋根のもとに収められ、元文ごろには花道が確立された。宝暦八年には廻り舞台も工夫され世界劇場史でも有名になつたほどである。

観客の多くは武士よりも一般民衆であつた。純粹に民衆のものといつた方が當を得ている。寛政以後は自由席であつた土間を区切つて櫓を作り、指定席が設けられ、低料金の観劇は縮少されていつたけれども、民衆の社交場として、民衆とともに発展の道をたどつたのである。

近松の浄瑠璃にそろばんがしばしば登場したように、その後の浄瑠璃にも歌舞伎にもそれが登場した。いまそのいくつかを紹介してみることにならう。

鳴神

歌舞伎十八番。古くは貞享元年二月、江戸中村座興行、初代市川团十郎自作の「門松四天王」。現行作は寛保二年一月、二代目团十郎初演の「雷神不動北山桜」の一部として演ぜられた。

雲の絶間姫が色仕掛けで鳴神上人に近づくと、弟子の黒雲坊、白雲坊がこれを止める。

白雲 コリヤ、ならぬぞくく。ずんとならぬぞ。

絶間 でも、お師匠様のお許しでござんす。

白雲 何のお許し。師匠の仰せ渡されでもにょじんきんせい女人禁制。

黒雲 謹請々々、東方白竜白蛇、誓文くつされならぬぞくく。

白雲 ア、穢らはしい、七里けんばいく。

黒雲 オ、七里けんばいく。しつちんが一ちん、二ちんがさつちん、二二天作のごんご道断の女人、飛びしさらう。

白雲 さうぢや。この壇場へ女を入れては、行法の算盤が合はぬわい。

黒雲 南無ばちく算用そわか。

絶間 アレ、あのやうに、言うてとござんす。

鳴神 よいく。あのやうに言ふ筈ぢや、壇場近く女は寄る事はかなはぬ。

現行のものである。わり声の七進が一十、二進が一十、二二天作の五や、行法の算盤、南無ばちばち算用などという語が出てくる。商人だけでなく、工人も武士にも理解された言葉である。

つぎの浄瑠璃を聞いていただきたい。

仮名手本忠臣蔵

浄瑠璃十一段時代物 寛延元年八月 竹本座初演 作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳。元禄十五年十二月十四日播州赤穂の浪人大石内蔵助以下四十七名が亡君浅野長矩ながのりのうらみを晴らすために吉良義央きちらよたなかを討った事件を扱ったもので、元來人形劇のために浄瑠璃（義太夫）として書かれたものである。討入から数えて四十七年目、義士の数四十七

はいろは仮名の数と同じことから「仮名手本」としたものであるという。

三段目 足利館門前進物の場は加古川本蔵が師直に贈賄するところである。殿中松の間の場の直前である。

詞に随ひ加古川本蔵、衣紋繕ひ悠々と打通り。下も部に持せて進物共、師直が目通りにならべさせ、逢、さがつて蹲り。

ハア憚りながら師直様へ申し上奉る。此度主人若狭の助、尊氏將軍より大役仰付られ下さる段、武士の面目身に余る仕合。若輩の若狭の助、何んの作法も覚束なく、いかがあらんと存る所に、師直様万ん事御師範を遊ばされ。諸事を御引き廻し下され候故。首尾能御用相勤るも全主人が手柄にあらず、皆師直様の御執成と。主人を始め奥方一つ家中、我々迄も大慶此上や候べき、去によって近か比左少の至に候へ共右御礼の為一つ家中よりの送り物お受け遊ばされ下さらば生前の面目一入願奉る。則目錄御取次ぎと伴内に指出せば（中略）

先おさきにと跡に付き。金で頬はる算用に。主人の命も買取る。二一天作そろばんの、けたを違ぬ白鼠。忠義忠臣の、道は一と筋真直に。打連れ御門に入にける。（岩波文庫）

義太夫の語る美声にそろばんが登場する。何と楽しいではないか。

つぎも浄瑠璃である。

双蝶々 曲輪日記

寛延二年七月 竹本座初演「忠臣蔵」と同じく出雲、松洛、千柳の合作。全九段浄瑠璃世話物、歌舞伎化も同年。濡髪長五郎、放駒長吉の相撲取の二人の長を「双蝶々」と風流な文字に書き換えたもので、七段目の道行に、汝も長、われも長、二人合せて蝶々とまれ……がある。序幕の角力場の場に

……東の方から息急ぎと、歩み来るは与五郎が父親、東からげの山崎与次兵衛、年は六十二か三か、始末親父の頭者、荷物丁稚も遅れ足、褌皺ちがく泣面抱へ

「申しく親旦那様、些とお休みなされませぬか、肩も足も堪りませぬ」

「エエ穢い奴ら、道なら只七八里山崎から一息、昼休みは北浜の御座敷、是れも立ちながらつい爰まで、夫れにちよこく休んだら茶の銭も賤らぬ、幸ひ爰に茶店、些との間休まさう」と床儿に掛れば「お茶上りませう」「イヤ飲みたうござらぬ、火を借る計りぢやぞ、儂渴くなら飲め、徒茶飲むな腹が損ねるぞ、イヤ亭主、相撲は偉い繁昌、追付果てますか」

「イエく今面白い最中、今日は濡髪と、アムどれやら屋敷方の抱へ相撲との所望有る筈、ちと御見物、札一枚が六十八文、中木戸が七十八文」

「おつと待つたり、ドレそこな十露盤貸しをリサアいうたり」

「エム札が六十八文」「是れが三人で二百十二文よ」「中木戸が七十八文」「是れが又三人で二百四十二文」「中棧敷が七百六十」「オイ、七百六十」「上棧敷が一貫八百」「オイ、一貫八百、是れに酒が小半アア三十よと、蛸の足一本が八文、三太めが小豆餅が十で十文、コリヤ久三わりや下戸かつ」

「ハイ酒も餅もよござります」

「仕舞うた、此奴がかいせで二十よ、総メ三貫八十二文、是れに目が四文、こりや目が出るよしにせう。儂も能う心得て、錢徒に使ふな、三貫八十文、大抵では儲けられぬぞいやい、此の銭をつかはずに一つにして濡髪に遣れば、結構な正月ごが出来る。ま些と休んで評判聞けば見たも同然、どれ茶一つ」

江戸時代と明治とを比較してみたが、江戸時代の計算が非常に面倒な方法であったことがこれで知れよう。十進数を扱う現代人にとつて、江戸時代の不十進数の計算は理解し難いところが多い（町・反・畝・歩にしても、間・尺にしても、九十六文〓百文にしても、両・歩・銖にしても）が、浄瑠璃中にもこんな問題が入ってくるのである。

こたいろきむひのよしめ
五大力恋絨

寛政六年二月、大坂中の芝居に書きおろされた脚本、初代並木五瓶の作。西鶴の「好色五人女」、近松の「薩摩歌」の源五兵衛、おまんの名前をそのまま使っている。元文二年七月、曾根崎新地で起った五人斬の事件を題材にしたものである。

五大力とか五大力菩薩と記して手紙の封じ目に書いておくと、他人の目にふれずに無事に先方へ届くという信仰に発したまじないがあるが、二幕目大和町貸座敷の場で、小万が三味線の裏皮に「五大力」と書くくだりがこの芝居のクライマックスとなっているのでこのような外題がついた。

「いつまで草のいつまでも、なまなかまみえ物思ふ、たとひせかれて程経るとても、縁と時節の末を待つ、なんとせう、互ひの心打ち解けて、うはべはとかぬ五大力、さはさりながら、変るいろなき御風情、やがて逢ほぞえ、語ろぞえ、惜しき筆とめ候かしく

小万 これ見て下さんせえ。

源五 ムウ、すべて女の人手に渡す、文の封じ目、開かせまいとて認める五大力。

小万 サイナ、お侍さんの魂は刀。

源五 町人の魂は算盤、秤。

小万 芸者の魂は三味線、その三味線の封じ目堅う、心の誓ひの五大力。

源五 外へ大事は洩らさぬといふ。

小万 アイ、お前の頼み、三五兵衛さんが胸のうち。

源五 首尾より聞いたその上で、

小万 やがて逢ほぞえ、語ろぞえ。

源五 マア、それまでは、暫しのうち、

小万 別れのやうに思はれて、

源五 ヤ。

小万 惜しき筆とめ候かしくぢやわいなア。

〔歌舞伎名作集〕上 江戸文学叢書第五卷)

武士の刀、町人に算盤と秤、芸者に三味線。作者はそれがおのおのの魂であると強調した。観客も無論異議のある筈はない。町人にそろばんは不可欠の持物であった。

東海道四谷怪談

文政八年七月 江戸中村座興行、四世鶴屋南北の作品である。五幕十場、夏芝居の代表作で、初演のときから忠臣蔵の世界を借りており、義士も登場する。序幕 宅悦住居の場で、お袖(お岩の妹)、与茂七(矢頭右衛門七)夫婦 寄遇のくだりがある。お袖は体こそ売らないが賤しい勤めの身、

与茂七…… 今まで多くの客に出た中ぢやア、自由になったのがあるだろう。

お袖 イエく、神様かけて、そんな事はない。証拠はお前にもあの通り。

与茂七 それこそ俺と知つてゐて。

お袖 イエ、知らねばこそあの様に。

与茂七 若し俺がやうに、無理やりにああしたらどうする。

お袖 そりやもう、お前、わたしが一心。人を見て法とやら、勇み肌のお客なら、馴れぬながらも職人の女房でござると嘘ついて、亭主の病気に勤めはすれど、心は清き清鈍きよかんな。かけて往いなして、また、あすの夜。坊さん客にはこつちから、帯は解かいで長々とお談議説いて詫わび事も、御出家だけにおとなしう、縁なき衆生は度し難しと、得心して帰るわいなア。

与茂七 また、店向たなきの商人あきんどならば。

お袖 宵を限りの四ツの鐘、これが別れのきぬぐと、思へば遅う床へ往いて、帰らりやならぬ勘定も、つい算盤のたまぐは、あすの夜ごんせと、だましてやる。

与茂七 侍客の山さんなら、ぬける手管もあるまいがな。

お袖 武家は元よりこつちのもの、手打ちにあはうが殺されやうが、忠義の為とだらしこみ、頼めばぐつと武士冥利せいらい、せう事なしに讃めそやし、いなした後へ旅人の客は一としほあわれしう、年貢の替りに来ましたと、云へば涙のかた手には、小豆一升大根一把貰う事もあるわいな。

与茂七 扱商売に馴るといふものゝ、あつぱれ、嘘の上達、来世は閻魔に舌をぬかるゝぞや（「歌舞伎脚本集」日本名著全集）

清元 おどけ俄煮珠取（おどけあじまるとま）

天保三年七月 中村座興行 中村芝翫の所作事 作者は二世瀬川如臯 通称「玉屋」。

へさア／＼寄ったり見たり吹いたり評判の玉屋々々 商ふ品は八百八町 毎日ひにちお手遊び子供衆寄せて辻々でお目にかけて値のない代物を お求めなされと辿り来る

へ今度仕出しぢやなけれども お子様方のお慰み 御存じ知られた玉菓 鉄砲玉とは事かはり 当って怪我のないお土産で 曲はさまざま大玉小玉 吹分けは その日／＼の風次第 まづ玉づくしはいほうなら

へたま／＼来れば人の客 などとじらせば口真似の こなたもいつかよぶ子鳥 たつきも知らぬ肝玉も 締まる時に は算盤玉の 堅い親父に輪をかけて 若い内から珠数の玉 オット留まった性根玉 しやんとそこらで留まらんせ

(以下略) (日本名著全集「歌謡音曲集」)

新内 道中膝栗毛

通称「弥次喜多」。十返舎一九の「東海道中膝栗毛」の中から適当な箇所を取って浄瑠璃に仕立てたもので、富士松魯中の自作自調になる。新内に作曲されているものうち、「赤坂並木の段」に、

ア／＼申し／＼お前のお子とも存ぜず、化物ぢやと思ひ違ひ。打ちましたは大鉈相。真平御免下さりませ イヤ／＼聞かぬ／＼。折角買った五合の酒。雫も残さずこぼしてしまひ。小さい者を酷たらしう。ひどい目にあはしたなど、グツト締むれば ア／＼申し／＼それでは咽の仏様がつぶれます。少し弛めて下さりませ。ア／＼五合の酒がこぼれたとは。ごがふ道断お気の毒。代は私が出しますから。一升のお願ひ。かんにせうとおっしゃって下さりませ。屹度お札に三升致します。四升云はずと御子簡、コレ五升でござります。エ／＼こいつ洒落どころか、ハイ／＼お腹立ちは御尤も、

疵養生の膏薬代を出しますから、どうぞそれにて御勘弁。それなれば赦してやる。サア金出せ。ハイいくら上げます。オ、命代りには安いものだが十両に負けてやるは。エ、飛んだ事をいふ。十六文の膏薬を、百貝付けても一分であまる二分に負けなせえ。イヤならぬ。二分がならずば三分よ。ア、駄目だ。そんなら四分か、エ、しぶといならぬ。くくわい。申しそれでは出来ない相談ぢや。言ひ値ぢや高い。オウそんなら一両負けてくれうわい。エ、十両の内を一両負けて九両とは面白い地口だ。しかし間男代でも七両二分が当り前。マア知らずば半分値さ。ム、五両に負けいか。ア、安いものだが負けてやるわ。サア金渡せ。エエお前現金かえ。知れた事だ。ハイ只今勘定いたします。コウト私が咽を。お前の其松の木見るやうな腕で。グット締上げた苦しみが死苦しきく八苦はく四九三百匁を五両として、跡が八九七十二匁とすれば、お前の方から少々おつりが参ります。(以下略)

誠にうまい語呂読みである。(「歌謡音曲集」日本名著全集)

一九の原作には

「十露盤に八算。食言くちげんにも八百」(八編序)

「大ふく町はおいらが通りをまつすぐに、当座町へ出て、判取町から店賃町を通って、地代屋敷の算盤ばしをわたると、そこが大ふく町だ」(初編)

「モウ塵劫記じやアうりましない」(後篇)なども出てくることは前に述べた。

与話情浮名横櫛よたせゆるなよこぢ

嘉永六年三月 江戸中村座初演の世話狂言で、作者は三世瀬川如臈。俗に「切られ与三」と呼ばれ、よく演ぜられるのは「源氏店の場」第三幕目である。外題は主人公の与三郎の与とお富のあだ名横櫛で結んだものである。

大詰 観音久次内の場に

久次 成る程、おぬしが体の疵は、……おれが体よりは又褻氣だ。……どうしても寒さ暑さには。

与三 満足な体と違ひ、疵にはどうでも悩むのよ……イヤ、疵と云やア、脛すねに疵を持てば笹原とやら臂があるが、

今こゝへ来かゝる時、どいつか後をつけて来ると思つて、早足に急いだはずみ、手拭を落したから、あすこの障子が目について、

思はず入った手拭屋は、島で馴染みの観音久次。

久次 それも真面目になりたての、堅気ではじく十呂盤染。

与三 こつちは人目を瓶覗き、見かけた家のかみさんは、

久次 こなたが以前の女房お富……思ひがけなく今はしも。

お富 その濃こい浅あ黄わう重じゆう夫……義理と情の半染も、

与三 くめば一河の水浅黄、流れわたって三尺が、

お富 不思議な縁で話し合ふ

久次 どうか芝居に

三人 ありさうだなう。(「歌舞伎名作選」第六卷)

以上である。

よく探せばもっと出てくるに違いない。がいまはこの程度にとどめておく。

三 その他

江戸文化は庶民すなわち町民文化と呼ばれただけに、いままでに述べなかつた分野でも独自の発展を遂げている。例えば浮世絵において然りである。かつて私は「浮世絵とそろばん」と題して、浮世絵の中に、また草隻紙類の挿絵に画かれたそろばんの数かずを紹介したことがある。これも丹念に探して行つたら面白い報告が出来るであろうけれども、与えられた紙面は一ぱいであるから他日稿したいと思つている。つぎに紹介するのは民謡である。

(1) 民謡

山路 実氏が日本数学史学会近畿支部の機関紙「和算」第三号に「みんようとさんよう」を発表したが、それによるとそろばんに関係のある民謡につきがあるという。

祝唄（座敷唄）たかしき（秋田、江戸中期）に、

たかすきの お倉奉行の前見れば

榊と十架とお帳面と

前に十呂盤ひかえある

米もあらし俵にして

俵は二階俵網かけた

前のお倉さ納め置く

手形下され旦那さま

手穂唄（四日市）

わたしの母さん名古屋に御座る 往けばよう来た上がれとおしやる 上がれお茶のめうすべり煙草 煙草嫌いなら
裏へ出て見やれ 菊や牡丹やおもとの花や おもと何故泣くなぜ飯たべん 腹が痛い夏病みしたか 腹も痛うな
い夏病みせんが 腹に七月七児ができて もしやこの子が男の子なら 寺へ預けて手習させて 手習戻りに算盤教へ
て算盤戻りに馬買うてのせて 馬に乗るとて馬から落ちて 馬に蹴られて腰骨折って 医者をお呼ぶとてお顔を拭
いて お顔拭くとて目玉を拭いて お医者服医者も御面倒でござる 御座るお医者が藪ぢやものソコソコ一対貸し
ました。

子守唄（悪口唄）秋田県

妻流産して（あばはっさんして）

父動天作の五（ててどう天作の五）

鯉節 貝焼（かつぶそ、かいやき）

飯九進の一（まま九しんの一）

山路氏の解説によると

奥さんが流産をしたのでご主人がびっくり動天した。そして炊事ができないので、いきおい簡単なおかずにする
が、御飯（まま）を炊く、いわゆる炊事に苦心（九進）をしている光景をわり声を入れてよく唄っているとある。

山路氏は以上のように報告されたから補足する意味で若干私も紹介させていただくことにしたい。

最初の祝歌 たかしき（秋田）が青森ではつぎのように歌われる。（中津軽郡）

アエデヤヤ、高杉の御倉奉行衆の前見れば、榊と斗掛と算盤と、米はよい米上米で、俵にかいとび二重俵あみかけて、真中五どこ縦繩とし、倉の中へまき揃へ「日本歌謡集成十二」

早少女歌（舞踏歌） 福島県北会津郡

旧正月十四日太鼓や三味線にてはやし、毎戸を舞い歌う

舞ひこんだよな、ふりこんだ、七福神を先きに立て、あまたの早少女舞ひこんだ、おん家を繁昌と舞ひ込んだ。おん田の神のお授けで、おん子を三人もたれたり、一番めのもしおん子は、また、おん土方となされたり。おん土方にとりては、また弓矢をとるのがよいとな。二番めのもしおん子は、また町人方となされたり。町人方にとりては、またそろばんとるのがよいとな。三番目のもしおん子は、また百姓方となされたり。百姓方に取りては、また鍬鎌とるのがよいとな。こゝらでお暇申しやれ、早少女だち、これがおんへのお早苗なまゆり振。

大沼郡ではもっと簡単になる。

サーヨナ、舞ひこんだく。さうとめしゆうが舞ひこんだ。

ハー、一番目のもし御子は、またさむらひ方となされた――。

ハー、二番目のもし御子はまた百姓方とはなされた――。

ハー、三番目のもし御子は、また町人方となされた――。

土方にとりては、まーたー、矢らをとるのよいとな――。

町人方にとりては、まゝたり、そろばんとるのがよゝいとな――。

百姓にとりては――。また、鍬鎌とるのがよゝいとな――。「日本歌謡集成十二」

伊勢踊音頭 奈良県

わしとおまへは、そろばんのこひよ

さんし十二で、いろづいて

さんご十五で、よめいりし

四五二十でかねつけて

五五二十五で子ができて

五六三十で、いね、いねと

いふや又いにまする。おちるなみだは

八八六十四とやら かみもしまだに、はもしろに、もとの十五にしておくれ(宇智郡)

「日本歌謡集成十二」

以上がある。

(2) なぞ

なぞなぞのことで、三段なぞ、二段なぞがある。

まず二段なぞから紹介してみよう。これは問と答から成っている。

二段なぞ

江戸文学と珠算

闇の夜に 鬼の算盤

答 鞍馬山(暗間算)

「風流新撰なぞ尽し」「新なぞつくし」(宝曆ごろ)

ゆびさきでいぢり まわすといわれるものは

答 そろばん

「笑いかど」(江戸時代)

「わらひ袋」(江戸時代)では

ゆびさきでそろそろといぢり まわせばついわれるものは

答 算盤

となっている。

年代は不明だが、地方で採集したものに、割つても割つても割りきれんものナーニ

答 そろばん(備前)

竹にちん車にガツチャン ギツチャン ナーニ

答 そろばん(武蔵)

すもろう かみろう ろろつぶ 六つ粒 すうじゆう すつきり ざあらい ナンゾ

答 そろばん(羽前)

あれ これ それ ナンジヨ

答 行灯、香炉箱 算盤(陸中)

置くとて たがく

答 そろばん(羽後) (たがく||手に持つ)

置けといえは 持上る

答 そろばん（陸奥）

置けてば たなぐもの ナンダ

答 そろばん 馬の鞍（陸奥、津軽）がある。

三段なぞ

これは間と解と答から成るもの。

算盤とかけて 子早い女房ととく 心は 産よう（算用）する

「謎々玉手箱」（天保ごろ）

算盤とかけて 薪ととく 心は 割ったりかけたり（薪を割ったり秤にかけたり）

「浪花みやげ」（天保十一年ごろ）

「算盤の達人な一に 神功皇后ととく 心は 三韓（算勘）を手に入れる

「御伽なぞ」（享保年間）

西瓜すいかの蒸じきとかけて 見一の算盤ととく 心は 割って見ねば知れぬ

「春の淡雪」（江戸時代）

箱入娘とかけて 亀井算ととく 心は わりにくい

「なぞかけ」（江戸時代）

美人の集りとかけて 何ととく 算盤ととく 心は 玉ぞろい（若狭）がある。

江戸文学と珠算

四段なぞ

下帯嫌う相撲とりと 三味線やかましがる座頭と そろばんしらぬ商人と うそつかぬ太鼓もちと
客に異見する揚屋の亭主と 経帷子見ていましがる出家とは、

碓のひびきで頭痛のおこる米屋の女房にひとしく、蛙みてにげる蛇にあいおなじ、

「絵本名名子草」

(3) 地口

世の人に知られている成語に、音声の似かよった別の語をよせて、一つの語に二様の意味を含ませる語または句のことで、滑稽のたわむれにする。語呂という人もあり、文に記したものが地口、口で話せば洒落である。

算盤先の費——転ばぬ先の杖

算盤ばちばち売得を知る——この松忽ち大木となる「行燈地口語呂合」

六進が三ちん——国姓爺合戦

「画口合画譜切」

(4) 無理問答

一年を三百六十日とは如何

九十六文を百文といふが如し

「松の寿」(天保十一)

(5) いろは喩

そろばんの 桁にはづれし たわけもの 割って合わせて 心しらべよ

現在までに調べられたなぞ類は以上の数点である。詳しく調査したらもっと出るのであろうが現在までのところはここまでである。しかしずい分あるものである。

おわりに

以上四回にわたり、長ながと記したが、そろばんの語彙集めに終ってしまった感もないではない。しかし、江戸時代の文学作品の中に、これほどまでにそろばんが登場して来ようとは筆者自身が考えも及ばぬことであったのである。

明治時代に「古事類苑」が発行されて、計算、算用、和算のことなどはその「文学部」(三)に収められている。そろばんについても若干の記載があるが、江戸時代全期を通してこれを紹介したものは従来皆無であった。未開の分野に、いくらかでも系統づけられるものがあつたと感じてくれる人があつたら幸いである。